

2010年11月3日・4日

# 劇団道化座

## 「オハヨウ、母さん!!」北京公演

“The 4<sup>th</sup> Festival of National Theatre of China (FNTC) – Splendid Asia”

中国国家話劇院第4回国際戯劇季 — 華やかなアジア —



みんな、笑顔 !!

色づいた並木道を学生が闊歩する北京師範大学、その正門を入ったすぐ右手に、今回、〈中国国家話劇院第4回国際演劇季〉—華やかなアジア—に招かれ、劇団道化座が「オハヨウ、母さん!!」を公演する北国ホールはあった。

2010年11月3日19:30開演、演劇祭の全責任者劉鉄鋼氏の挨拶が始まる。今回で15度目の訪中公演、海外での公演数も20回となった。9月以降、東京、西宮での自主公演、それに続く県内の移動公演など団員の疲労もピーク、開空出発寸前に主要メンバーが体調を崩し、16名の予定をやむなく14名での訪中となった。異例の事態に、7人家族の設定を急遽6人に変更、台本や音響をやり直し、北京での初日を迎えた。

劉鉄鋼氏の挨拶が終り、客席は静かに観劇の姿勢になる。いよいよ開幕。私たち道化座も大変だったが、日中関係が揺れ動くこの微妙な折り、大学からのホール使用中止要請や学生へのチケット販売の停止など自粛の風潮に対し、私たちを迎え入れる中国国家話劇院も様々な問題を乗り越え今日を迎えた。公演中止も視野に入れ連絡すると、即、劉鉄鋼氏から「演劇祭は互いの友情に基づくもので、政治などに影響されてはいけません。予定通り行います。」との返事を戴いた。今回の演劇祭のテーマは「華やかなアジア」「素晴らしいアジア」だ。外出時はどんなに近くても必ず中国のスタッフが付添い、ホテルまで送ってくれた。情勢に対応したさりげない気遣いに、中国側の強い信念と開催への意欲を感じた。

幕が開くと、神戸を舞台にした私たちのお芝居が始まった。忙しく立ち働く母、炊飯器から炊きたてのご飯の湯気が立ち上り、次から次に起きてくる子どもたち。どの家庭にもある慌ただしい朝の風景だ。その内、散歩から帰ってきた祖父は最近老いが深い。物語はこの老いていく祖父と家族たちの姿を描く。賑やかな朝の食卓、子どもたちのちよつとした我が儘や兄弟姉妹のやり取り、チラシを広げ安くて良いものを選ぶ母、母に洋服をねだる娘、祖父に漢字を教えてもらう孫娘、炊きたてのご飯の匂いや立ち上るあたたかいお鍋の湯気同様に、どれもみな誰もが経験したことのあふれる家族の風景だ。何気ない日常の積み重ねだけだが、祖父と孫娘の語らいは、後に続く者へ伝えることの重要性をさりげなく描く。「生きる」ことはただ老化するだけではなく、知識や経験を身につけ、成長していくことだと気づかせてくれる。

家族全員の山登りの場面では桜舞う中、老いた祖父が歌う「丘を越えて行こうよ～」の歌声とともに、受け継がれていく「生命」の輪廻を緑の自然の中で伝える。自らの生活と重ね合わせ、家族のぬくもりと「生きる」意味をさまざまに思いめぐらせてくれる。1時間45分の芝居はあっという間に無事終了、客席から熱く温かい拍手がわき起こった。

アフタートークでは、「何も事件は起こらないのに、あたたかい舞台に大きな感銘を受けた。」と、観客がロクに語ってくれた。そこには、長年、道化座が取り組んできた芝居作りの手応えがあった。「作品の意図は？」の質問に、劇作・演出・主演を担い、今や自らの老いも舞台に取り込む須永は「ドラマは日常の中にある。」ときっぱり答えた。1995年の神戸の震災以後は特に、たかが演劇と言いながらも、「今」を生きる私たちにとって、役立つ演劇でありたいと願いつける須永の強い意志が伺えた。気が付くと、客席はみな穏やかな笑顔でいっぱい。一般客はもちろん、国家話劇院の敵鳳崎、查明哲、史麗芬各副委員長のお歴々も、にこやかに参加されている。駆けつけて下さった北京人民芸術劇院著名俳優朱旭、宋鳳儀ご夫妻、武洪副委員長率いる中国鉄路文工団話劇団の面々も、みな笑顔だ！朱旭氏などは親指を立てて満面の笑みで何度も「非常好！」を繰り返して下さった。芝居はこんなにも人の心を豊かにするのかと、熱いものが込み上げてきた。



翌11月4日の客席は超満員。急な知らせにもかかわらず、于黛琴女史や劇評家劉平氏も駆けつけて下さり、嬉しい成果を得て千秋楽も無事に終えた。

翌11月5日、早々と帰路に着く。首都空港への車中、「演劇祭で一番人気の道化座がたった2回の公演なんて…」と劉氏の優秀な制作スタッフ楊帥嬢が嘆いてくれた。できればもっと公演したかったが、帰国後も移動公演や新作上演が待っている。小規模な劇団道化座にとっては精一杯の日程で、私たちのために奔走してくれた楊嬢には、ただただ感謝あるのみだ。彼女のようなフレッシュな友との新たな出会いも大きな収穫だ。

近年、中国国家話劇院の活動はめざましい。昨年44作に新作13作を加えた計57作品を香港はじめ国内各地で年間240回以上を公演。今年はこちらの国内公演に、韓国、台湾、日本での海外公演、そして地元北京での二年に一度の国際演劇祭開催と超多忙だ。私たちの北京滞在中も、周志強院長率いる田沁金女史演出、名優雷恪生氏主演「四世同堂」が台湾公演中であつた。劉鉄鋼氏も演劇祭終了後は「最後の闘争」全国ツアーが待っている。東奔西走、多忙の限りだ。

ここ中国にも、演劇に命を注ぐ人々がいる。演劇祭での観客との「出会い」、同じ演劇を志す者同士の熱い「出会い」は、私たちに新たな勇気を与えてくれる。それは国を超え、政治をも越えた心の交流であり、人が創り出す演劇の持つ底知れぬエネルギーだ。「生きている」ことは素晴らしいし、人々の「生きている」心を描く「演劇」は素晴らしい。やはり、演劇の神様に感謝だ！

そして、来年は待望の中国国家話劇院大劇場が完成する。次回北京訪問では、完成なった大劇場で素晴らしい舞台をぜひ拝見したい。あらゆる困難を乗り越え、懐深く私たちに迎え入れて下さった中国国家話劇院の皆さまに心からの感謝と敬意を表し、秋から冬へと深まりゆく北京を後にした。

報告：馬場晶子

# 扉に新しい守りの神様

- 日本劇団道化座へ 新たな年の祝福 -



中国国家話劇院 プロデューサー 劉鉄鋼

劇団道化座は中国演劇界の古くからの朋友です。昨年末、劇団道化座が参加した北京での〈2010 中国国家話劇院国際演劇季－華やかなアジア〉で、私はまた須永克彦先生と馬場晶子先生のすばらしい演技を味わうことができました。

「オハヨウ、母さん!!」は、人のあるべき姿を現代社会に強く問いかけています。平凡な家庭の物語として描きながら、現代社会に生きる私たちに「本当に必要なものはいったい何なのか？」を考えさせ、倫理、道徳、良知の回復を迫ってきます。この芝居に感動させられた理由は、シナリオの核心が我々現代人のひ弱な神経と軟弱な精神に触れ、揺れ動かしただからです。絶え間のない物質面での現代化は、人類の生存に欠かせない精神世界の伝統の継承と追求に少しも満足を与えるものではなく、取って代わられるものでもありません。

私たち地球村の人々にとって、2011 新年は鼓舞、激励、挑戦の年です。春節を前に娘とともに中国の習わしに従って「福」の字を扉に貼りながら、私は宋の時代の文豪王安石が書いた古詩を思い出しました。老朋友である劇団道化座に対する無限の思いと祝福を込めて、この古詩を贈ります。『爆竹声中一歳除，春風送暖入屠蘇。千門万户曈曈日，総把新桃換旧符。（爆竹が鳴る中で一年が過ぎ、人々は屠蘇酒を飲み、温もって春の到来を感じる。朝陽が家々を照らし、門に新しい神様を張り替える。）』

私たちが一生を捧げる演劇において、各自それぞれの職責を果たし、より美しい、より水準の高い作品を創り、私たち演劇郷里のすばらしい未来を切り開きましょう。